



自然を語る会

10月21日（土）10：00～12：00 於、日比谷図書文化館セミナールーム A

参加者 12名

担当：鈴木善次さん

ポール・ブルックス著 （上遠恵子訳）『レーチェル・カーソン』  
第16章『沈黙の春』の起源  
第17章「専門家を結集して」

この二つの章では、カーソンが、かの偉大な作品『沈黙の春』（彼女が56歳で亡くなる2年前に完成・出版）に取り組んだ経緯が描かれている。それは、観察者、学者、化学者、医者等の専門家さらにカーソン愛好者、友人たちの協力と英知をもとに完成に至る彼女の熱闘と栄光への実話である。

（次回11/18、鈴木さんは欠席ですが、参加者が、再度両章について語り合う予定です。あいにく鈴木さんは同日欠席されますが、12/16再登板の予定です。）

本日鈴木さんは、16, 17章関連で、今春話題に上り、騒動を巻き起こした外来生物のヒアリを取り上げ、かつて大規模な合成化学薬品散布による、生きもの皆殺し的方法で行われたヒアリ駆除に戦いを挑んだカーソンと、これに対する最近の学者たちの意見/社会の動向（カーソンへの反論を含む）などについて、鈴木さんが用意された各種の資料などをもとに解説され、皆で議論した。

アメリカ経済が巨大化し隆盛を極めた頃（日本の高度成長が初期始動）である1950年代後半、カーソンが『沈黙の春』で取り上げたマイマイガ、蚊やブヨ、マメコガネ、ヒアリ等々に対しての、害虫撲滅の名のもとに空より行われた化学合成薬品類の大量一斉攻撃…。産業界、行政当局に対して戦う強固な意志を持ったレイチェルの姿が思い浮かびます。命あるものについて関心がない、地球環境など知らぬ時代だったのだが、現代はどうでしょうか。外来害虫対策は初期始動が大切で、その生物をよく知らないと、最適な対処には確信が持てないのでは。続編を楽しみに。 （文責：岩淵徹郎）